

第6章 三好長慶による飯盛城における家臣統制

～地歴考古学部の資料から～

宇治田健祐・佐々井右京・曽根 憩・那須大輔・原 慈生・三村皐月

(大阪府立四條畷高等学校 77 期生)

要旨

76期54班の研究を引き継ぎ飯盛城から発掘された遺物の洗浄・注記・接合と並行して文献調査を行うことによって、織田信長に先駆ける天下人である三好長慶が居城していた飯盛城の曲輪の機能を解明しようとした。その結果飯盛城は城主の三好長慶が山頂に住み、家臣をその周囲に住ませることで高低差を利用して社会的身分を家臣に示す構造、いわゆる近世城郭的な構造を取っており、近世城郭の萌芽が確認できる最初の城郭ではないかと考察した。

Abstract

Last year, our seniors from this school found out that high ranking Samurais lived in a castle in northern Imori. We will take over their research and think about the operations of Imori castle. We researched using various pieces of literature. For these research results, we believe, as a modern castle, no castle in Japan is older than Imori castle.

1 概要 執筆者 宇治田健祐・原 慈生

三好長慶は戦国時代を生きた武将である。彼は室町幕府 13 代将軍足利義輝を京都から追放し、都の政治の実権を握った人物として知られている。実際、同時代のキリスト教宣教師の文献などに「天下を治めていた」「天下の支配者」といった内容が記載されている。

その三好長慶が 1560 年から居城としていたのが飯盛城である。近年四條畷市、大東市は飯盛城に注目しており研究を進めている。それによって当城は織豊系城郭に先行して石垣や礎石建物を取り入れた先進的な中世城郭ということが明らかとなった(大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020)。このような歴史的価値から飯盛城は令和 3 年に国史跡に指定された。当城跡は四條畷市と大東市の合同調査によって少しずつ全容が明らかになっているが、未だ不明瞭な点が残っている。そこで過去に大阪府立四條畷高等学校(以下四條畷高校)に存在していた地歴考古学部が飯盛城跡で発掘し、その後同校の地歴公民科教室に保存されていた遺物を整理し、そこで得た情報と文献調査で得た情報を組み合わせて飯盛城の機能、構造を検討する。またそこで明らかとなったことから三好長慶がどのように家臣統制を行っていたのかを解明したい。

本研究は前年度の四條畷高校 76 期生による「昭和 42 年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!!」の研究を引き継ぐものである。前研究では地歴考古学部が発掘した遺物を基に飯盛城跡の研究を行った。そこでの考察は「本来軍事区域だと思われていた飯盛城の北側にも武士が住んでいた」というこれまでの研究に一石を投じるような内容であった。しかし前研究は遺物の整理が不十分なまま終わってしまった。そのため本研究では遺物の整理を引き続き行い、飯盛城研究においてあまり用いられていない文献資料も併用して曲輪の機能を再検討していく。

2 先行研究 執筆者 宇治田健祐・那須大輔

飯盛城の城郭としての詳細な研究は、平尾兵吾が昭和 6 年(1931)にまとめたものを基礎に進めら

れてきた（平尾 1931）。ここでは本丸、高櫓、千畳敷など現在も使用される曲輪の名称が示された。この時点では、南方の曲輪が大規模であったため南側の防御が厳重であるとした。しかし昭和 56 年（1981）に中井均は飯盛城の防衛機能について平尾の考察とは全く異なる見解を述べている（中井 1981）。中井は本郭より北の堀切によって独立している一ブロックの郭群があり、そこを北方防備の最前線とした。一方南方については、南丸や千畳敷が防衛線を張りつつも馬場辺りの曲輪には兵站施設などがあったと推測し、防備に関しては北方に比べて弱く、支城群の多さに表れていると記した。このような見解の相違は四條畷高校地歴考古学部による東西方向の尾根に作られた曲輪群の存在の発見によるものである（四條畷高校地歴考古学部 1965、後述）。この成果により前述のように飯盛城の防衛機能についての説が一転している。中西裕樹は平成 6 年（1994）に、南北に伸びる飯盛城跡の曲輪を三つ（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ部）に区分して検討した（中西 1994）。Ⅰ部は北端から「御体塚丸」、そこから派生する三つの尾根を含んだ部分であり、Ⅱ部はそれより南から本郭、高櫓郭周辺、加えて派生している三つの尾根を含んだ部分である。この二つは堀切や石積みが多く設けられ、城域南部の千畳敷から南丸周辺を含むⅢ部と比べ、防御性が強いと述べた。この要因として野崎城からのルートが飯盛城南部に繋がっていたためとした。つまり飯盛城は周辺のルート全体を取り込んで分散的な防御性を持たせようとしていると考察している。なお各曲輪には平尾のころから本丸、高櫓、千畳敷などの名称がつけられていたが、現在は中井が平成 25 年に示したⅠ～Ⅹ郭までの名称がより一般的に用いられている（四條畷市教育委員会編 2013）。

これらの先行研究を踏まえて四條畷市と大東市は平成 28 年から令和元年度にかけて、飯盛城跡の総合調査を行った。その結果、北側は主尾根に築かれた曲輪の面積が狭く起伏が激しいことや主尾根から東西に派生する尾根上に曲輪群が展開していること、南側は広大な面積を有する曲輪が築かれていることが明らかになった。このことから、北側は防御空間、南側は居住空間という機能が想定された（大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020）。

また、かつて存在した四條畷高校地歴考古学部は昭和 42 年に飯盛山で総合調査を行った中心部からは外れた曲輪で発掘調査を行っていた。その調査はトレンチと呼ばれる溝を設けた、本格的な考古学的手法を用いたものであった。その後地歴考古学部は休部となったが、令和元年、発掘した遺物が地歴公民科教室に保管されていたことがわかり令和 4 年 76 期 54 班が遺物を整理した。その結果、遺物の中から切羽、天目茶碗、灯明皿を確認し、そこから発掘場所では位の高い武士が生活していた、と結論づけた（古家・佐藤・新羽坪・松下 2023）。このような前年度の考察を元に、我々は飯盛城の北側に家臣が居住し、南側に主君である三好長慶が住んでいたと仮説を立てた。

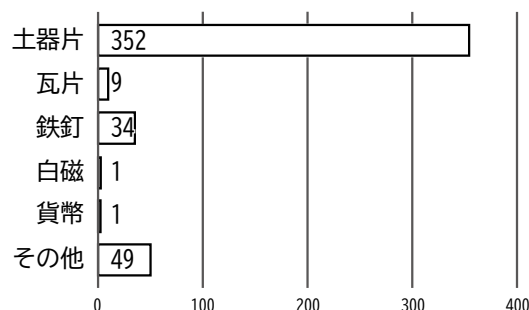


図 1 昭和 42 年調査出土遺物の種類と数

3 研究方法 執筆者 三村皐月

北側に家臣が住んでいたことを確認するために、我々は 76 期 54 班の研究に引き続き遺物の整理を行った。

出土した遺物の総数は、地歴教室に残っていた当時の日誌、調査報告書（東の丸調査報告係編 1968）、部誌（岩田ほか 1969）の記録により、446 点であった。図 1 はその種類別の内訳を示している。土器片が 352 点、瓦片が 9 点、鉄釘が 34 点、白磁が 1 点、貨幣が 1 点、その他が 49 点であった。

一方、図 2 は現在地歴教室に保管している遺物の



図 2 現存遺物の種類と数

種類別内訳である。現存数は340点で、106点は現在行方不明である。内訳は土師器264点、瓦質土器19点、貝殻3点、鉄釘31点、壁土3点、その他20点であった。特に264点の土師器のうち、189点が皿であった。図3のその他の20点には、天目茶碗、白磁の皿、基石、明治期の銅銭、江戸期の煙管などが含まれている。また、5月の発掘調査で目貫（刀の部品）が、昭和41年12月の踏査で切羽（刀の部品）が見つかった。

これらの出土遺物の検討に加えて、並行して文献史料の精査を行った。史料の探索には『飯盛城跡総合調査報告書』を用いた。探索の結果、特に重要と思われた『フロイス日本史』『十六・七世紀イエズス会日本報告集』については、原翻刻史料を確認した。また、『飯盛城跡総合調査報告書』に報告された『河内国飯盛旧城絵図』（東京大学史料編纂所蔵）も参照した。

これらの文献史料と出土遺物を結び合わせて考察を行った。

4 考察 執筆者 曾根 憩

飯盛城が存在した戦国期に拠点として機能した城郭である戦国期拠点城郭の特徴として、政治・軍事・生活機能が一体となっていたことが挙げられる（千田2000）。千田は織豊政権に先駆けた戦国期拠点城郭の初期の例として滋賀の観音寺城を紹介している。その特徴は、本来強い求心性を備えた主部が作られるべき山頂部は小さな曲輪に過ぎず、主郭が山頂からそれた尾根上に築かれるという並立的な構造であったことである（千田2000）。

他方これまでの飯盛城跡における発掘調査で家臣の居住に関係する遺構・遺物の発見があったことや、京都や堺など多くの政治的権力を持つ要地に睨みが利く場所に城が築かれていることから、飯盛城も軍事・生活の両機能を備えた城であったことが推察される。これに関する当時の史料として、日本を訪れたイエズス会士の記録（史料1、史料2）や、江戸時代に記録された飯盛城の絵図（史料3）が挙げられる。

史料1 （ルイス・デ・アルメイダ修道士がルイス・フロイス師と共に都へ旅したことにつき、福田で（イエズス）会の修道士らにしたための書簡、一五六五年十月二十五日付）¹⁾

「（前略）これらの貴人たちは皆、今や都とその周囲の国々を領する国主の家臣であり、その国主は三好殿（長慶）殿と称する。彼は領国中で最も強固な城の一つである当城（飯盛城）に、己れの最も信頼する家臣らと一緒に留まっており、また、彼ら（家臣）は家族や妻子とともに同所に住んでいる。（後略）」

史料2 （都へ出発するまでに、堺の市においてルイス・デ・アルメイダ修道士の身に生じたこと）²⁾

「（前略）三ヶサンチョ（頼照）殿という（三ヶの）城の主だったキリシタンの一人は、私たちがそこに着くということをすでに前から聞き知っていましたので、船を遣わしてくれていたのです。（中略）彼らはいずれも、今や都、及び周辺の諸国を支配している当国主の高貴な家臣たちで、その国主の名を三好殿と言います。国主はこの城がその領国中で最も堅

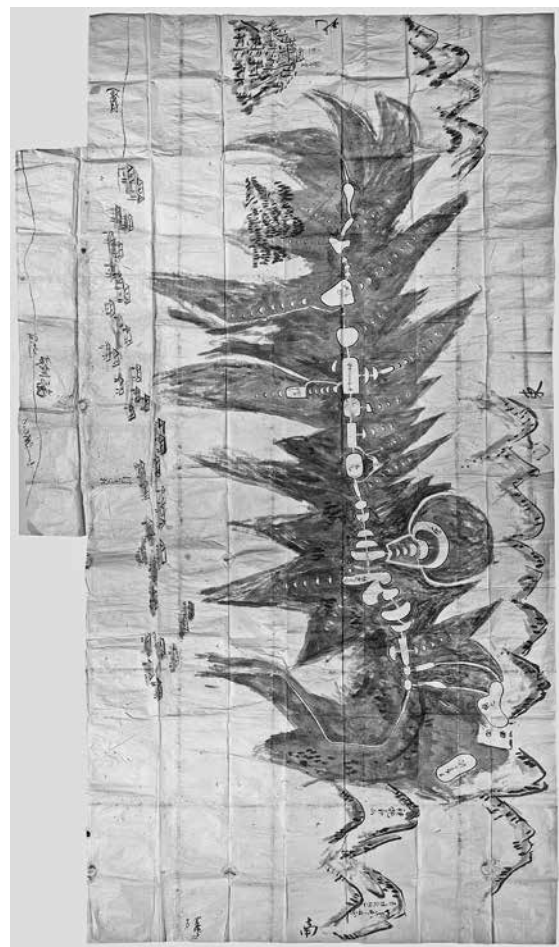


図3 史料3 河内国飯盛旧城絵図
（美濃加納永井家史料、東京大学史料編纂所蔵
『飯盛城跡総合調査報告書』より）

固な城の一つなので、当城に留まり、上記の貴人たちを極めて信頼していますので、彼らを傍に置き、一方彼らは家族妻子ともどもここに住んでいるのです。（後略）」

これらに加えて、河内国飯盛旧城絵図には、北側にある曲輪に「三ヶ殿曲輪」の文字列が見受けられる。史料2の「三ヶサンチョ（頼照）殿」と同一人物と考えられる。³⁾

これらの史料からは、飯盛城城主であった三好長慶が自身の家臣とともに飯盛城に居住していた事や家臣の家族や妻子が飯盛城に住んでいたという事が読み取れる。これは、飯盛城跡の遺構に居住区域があったという発掘調査の結果と一致しており、飯盛城が生活機能を備えていた可能性は高い。城主の長慶が住んでいたのは、中井均が指摘しているように城郭南部のⅧ郭（千畳敷郭）であったのだろう（中井 2020）。さらに、注目しておきたいのは長慶に加えて家臣が家族や妻子とともに城内に住んでいることである。「貴人」「高貴な家臣」といった表現は飯盛城に居住していた家臣の身分が高かったことを示すものであり、昭和 42 年に飯盛城跡で発掘された高級茶器である天目茶碗の破片から導き出された「(不特定の) 位の高い人物が住んでいた」という結論に一致する(古家・佐藤・新羽坪・松下 2023)。一方、この天目茶碗が発掘されたのは城の北側のことであった。これは四條畷市と大東市が飯盛城の山頂部で行った調査結果から導き出された、飯盛城の北側は軍事域、南側が居住域という見解（大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020）に一石を投じる結果である。しかし、同じ北側での調査とはいえ、両市の調査は飯盛城の山頂部で行われた一方、先の考察で使用した遺物はその周辺の曲輪（曲輪 31）で発掘されており、両者の機能が異なっていた可能性がある。城郭の構造について、大名が山城の頂上に住んだことは、山腹や山麓に居住した家臣との階層の違いを政治的に表したものであるという見解が存在する（千田 2002）。この見解に従うと、飯盛城の主要部は三好長慶が所有し、周囲の曲輪にはその家臣が住んでいたという考察が成り立つ。現に、先程の史料から三好長慶の家臣である三ヶサンチョ頼照が北西側の山頂部から外れた曲輪に住んでいた可能性があることが分かっている。また、飯盛城の山頂部の北側の区域ではⅤ郭曲輪 59（御体塚郭）において宗教的な施設の存在が想定されており（大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2020）、三好長慶が飯盛城の北側・南側に関わらず山頂部を所有していた可能性が高まった。このことから、飯盛城が大名と家臣の階層の差を見せつける政治的な舞台となっていたことが推測される。また、安土城以降の織豊系城郭の特徴である石垣や瓦葺の建物・礎石建物（中井 1990）が飯盛城で発見されているとともに、政治・軍事・生活の機能が備わっていることが資料から読み取れる。以上のことから、飯盛城は戦国時代後期において、織豊政権に先駆け、主君を中心とした城郭構造と、石垣・瓦葺・礎石建物という先進的建築様式を兼ね備えた近世城郭の萌芽とも言える例であることが推察される。

5 まとめ 執筆者 佐々井右京

このように、飯盛城跡の曲輪における居住状況について昭和 42 年の発掘調査出土資料及び文献資料から検討してきた。飯盛城の主要部は城主・三好長慶が所有し、自身の軍事域・居住域として利用する一方、主要部から東西に延びる周囲の曲輪群にはその家臣が居住していたと考察した。そのことは、城主と家臣の階層の違いを政治的に表していたと考えられる。

6 結論 執筆者 佐々井右京

上記の考察から、飯盛城は中世城郭でありながら、山頂部の中心域が城主（三好長慶）の所有とみられ、城主を中心に周囲に家臣団を配置する城造りだということがわかる。このことから、これまで一般的な中世城郭とされていた飯盛城が先述の通り高低差を利用した、主君を中心とした城造りであった点、文献調査や先行研究で明らかになった通り居住機能を有していた点、石垣や瓦葺、礎石建物といった織豊系城郭にみられる先進的な特徴を有していた点という 3 つの点から近世城郭に近い様式だということが指摘できる。最初の近世城郭と言われている安土城に先行して築かれた飯盛城こそが、

最初の近世城郭への萌芽が確認できる画期となる城郭であったと考察できるだろう。

7 展望 執筆者 佐々井右京

今後は、本考察の説得力を上げるために調査した曲輪以外の周辺の曲輪の詳細な調査が必要である。また、「理世安民」やキリシタンを許容したという三好長慶の思想などの他の観点からの研究も必要だろう。ひいてはこの研究が、戦国史の学術発展に貢献することを願っている。

謝辞

本論文の作成にあたり多くの助言をいただきました四條畷市教育委員会教育部スポーツ・文化財振興課實盛良彦さんに心より感謝申し上げます。

註

- 1) 松田毅一監訳1998『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期二巻、同朋社
- 2) 松田毅一・川崎桃太訳1978『フロイス日本史』第二十章（第一部五十九章）、中央公論社
- 3) 『河内国飯盛旧城絵図』（美濃加納永井家史料、『飯盛城跡総合調査報告書』2020、巻頭図版16）

参考文献

- 天野忠幸2020「文献資料から見た飯登城」『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会
岩田美奈子・江藤敬直・出口和美・藤原ひろみ1969「飯盛城址の研究―飯盛城東ノ丸一の曲輪調査報告―」『古流』第4号、四条畷高校地歴考古学クラブ
古家百恵・佐藤 凜・新羽坪里花・松下美桜2023「昭和42年度飯盛城跡発掘調査を掘り起こそう!!」大阪府立四條畷高校令和4年度探求チャレンジⅡ提出論文（本書第5章）
四條畷市教育委員会編2013『飯盛山城跡測量調査報告書』
四条畷高校地歴考古学部1965「飯盛城址の研究」『古流』第1号、四条畷高校地歴考古学クラブ
千田嘉博2000『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
千田嘉博2002「戦国期拠点城郭から安土城へ」『天下統一と城』塙書房
中井均1981「飯盛山城」『日本城郭大系第12巻』新人物往来社
中井均1990「織豊系城郭の画期」『中世城郭研究論集』新人物往来社
中井均2020「飯盛城の城郭史上における位置づけ」『飯盛城跡総合調査報告書』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会
中西裕樹1994「河内飯盛山城の構造について」『愛城研報告創刊号』愛知中世城郭研究会
平尾兵吾1931『北河内郡史蹟史話』大阪府北河内郡教育会
東の丸調査報告係編1968『飯盛城東の丸一の曲輪調査報告』地歴考古学クラブ
四條畷高校76期54班 研究ノート